

シンポジウム

## 中国古い文化の日本的展開

### 要 旨 集

日 時 : 2013 年 1 月 26 日 (土) 10:30~17:00

会 場 : 早稲田大学 26 号館地下多目的講義室

主 催 : 科研基盤(A)

「文明移動としての『仏教』からみた  
東アジアの差異と共生の研究」

科研基盤(A)「文明移動としての『仏教』からみた東アジアの差異と共生の研究」  
シンポジウム

## 中国占い文化の日本的展開

### ● 開催趣旨

本シンポジウムは科研基盤(A)「文明移動としての『仏教』からみた東アジアの差異と共生の研究」によるものである。本研究は、インド発祥の「仏教」が異文明としてインド以東に移動(東漸)したところを東アジア世界と仮称した場合、文明移動としての「仏教」が東アジア世界の諸地域に何をもたらし、いかなる世界の構築や文化の変容を促し、また、逆に、「仏教」そのものがいかに再生され続けていったのかを調査研究するものである。具体的には、君主権・国家・社会秩序の形成にはたらきかける「仏教」、造形・言語・文字の表現に変換を迫る「仏教」、諸宗教・儀礼・習俗の複合を促す「仏教」の三局面から、「仏教」が東方移動し、再生し続ける文明であったことを明かそうと試みる。今回は、仏教文明に対して占い文化がどのような影響を与えたかを考えるため、中国で生まれた占い文化の日本への伝播、日本での展開の状況を具体的に検討したい。

### ● プログラム

総合司会 森由利亜(早稲田大学)

10:30～10:40 趣旨説明 工藤元男(早稲田大学)

10:40～11:20 《報告1》 水口幹記(立教大学) 「日本伝来の占いに関する書物」

11:20～12:00 《報告2》 工藤元男(早稲田大学) 「具注暦の淵源」

…………… 休憩 ……………

13:00～13:40 《報告3》 小林春樹(大東文化大学)

「五行占の日本の変容 一天の信仰不在の日本における五行占一」

13:40～14:20 《報告4》 近藤浩之(北海道大学)

「日本中世期における易學の受容と展開」

—桃源『百衲襖』と胡一桂『易學啓蒙翼傳』—

…………… 休憩 ……………

14:30～15:10 《報告5》 山下克明(大東文化大学) 「宿曜道の特質と展開」

15:10～15:40 《コメント》 細井浩志(活水女子大学)

…………… 休憩 ……………

15:50～17:00 総合討論: 司会 新川登亀男(早稲田大学)

## 日本伝来の占いに関する書物

水口幹記（立教大学）

日本には数多くの占い関連の書物が、大陸・朝鮮半島から伝来している。それは、平安時代に編纂された日本伝来漢籍目録である『日本国見在書目録』<sup>にほんこくげんざいしょもくろく</sup>の記録からも確認できる。しかしながら、伝来した書物全てが参照され利用されていたわけではなく、むしろ、限られた書物によって日本の占いは成立していたとも言える。本報告では、平安時代から江戸時代までに日本に伝来し、利用された書物を中心に紹介していく。具体的には以下の三点について述べていく。

1. 『天地瑞祥志』<sup>てんちずいしょうし</sup>（前田育徳会尊經閣文庫本が最古の写本）

本書は、平安時代から利用が確認され、江戸時代中期まで、陰陽道家を中心に利用されていた書物である。しかしながら、本書は大陸や半島には残存せず、日本のみに残っている佚存書である。本書の成立をめぐるのは、唐・新羅（水口説）と確定されていないが、利用の中心は日本である（一部、『高麗史』に引用が残る）。本報告では、その利用の実態を示す事例（逸文などから紹介）を紹介し、確認していく。

2. 道蔵<sup>どうぞう</sup>・日用類書類の伝来と利用

本項目では、日本で作成された呪符を中心に、中国書物からの影響について述べていく。吉田神道が使用していた霊符が道蔵所収のものであること、若杉家文書<sup>わかすぎけもんじょ</sup>（陰陽道家伝来の文書群。京都府総合資料館所蔵）に残る呪符が日用類書に影響を受けていること、またその日用類書が日本のみならず、朝鮮半島、琉球、ベトナムにまで伝来していたことについて触れる。

3. 『天文図象玩占』<sup>てんもんずしょうがんせん</sup>（名古屋市蓬左文庫蔵）

本書は、全四冊で構成されている天文関係の占書である。本書は上下二段で構成され、上部にカラーで図・下段に占文が付された特殊な形態をもつ。本書が日本で利用された形跡はないが、今まで本書に関する論稿はなく、本シンポにおいて簡単に紹介していきたい。ここまでの検討の結果、本書は、明代に作成された『天元玉曆祥異賦（図説）』<sup>てんげんぎょくしやういふ</sup>などからの抄本であったことがわかっている。『天元玉曆祥異賦』は様々なヴァリエーションをもって日本・中国・韓国に複数残存しているが（最近、佐々木聡氏が『天元玉曆祥異賦』の系統を検討し、本年の日本道教学会で報告している。未論文化）、詳細に検討すると、本書にはそれらとは重ならない文章も見られ、成立の事情がわからないものである。詳細な検討については、現在鋭意進行中である。（なお、本書は蓬左文庫の目録には記されていないが、朝鮮本である可能性が高い。）

以上の三点を軸に、占書が中国を起源としながらも、朝鮮半島・日本など周辺諸国に広がり、受け入れられ、利用されていったこと、またその際に生じる日本的特徴について述べていきたい。

## 具注暦の淵源

工藤元男(早稲田大学)

1975年に中国湖北省雲夢県睡虎地11号秦墓から「日書」が出土して以来、「日書」あるいは「日書」とみなされる占書が多数発見されるようになった。これによって、中国古代社会の“占卜文化”の状況がかなり具体的に分り始めた。また、同じ墓葬からこうした占書と共に出土する資料として、“暦譜”が出土することにも注目される。「日書」を出土する墓葬の墓主の多くは、郡県レベルの地方官である。これより、「日書」および暦譜は、中国古代の郡県少吏層の職務活動と密接な関係があったとみなされよう。

“暦譜”の呼称は、羅振玉・王国維が『流沙墜簡』(1914年)の中で、暦関連資料を『漢書』芸文志・術数略の分類によって定名したことに由来する。しかし、具体的な篇題を有する暦譜類の資料が近年発見され、その分類と定名をめぐる議論が起っている。すなわち、1985年～88年、湖北省江陵県張家山136(336)号漢墓から「七年質日」(前173)が出土し(未発表)、その内容は干支日で日を配したものとされる。同じく「質日」の篇題を有する暦譜は、さらに睡虎地77号漢墓、嶽麓書院藏秦簡(伝世)でも発見されている。これらの「質日」には、干支日の下に墓主生前の職務に関する手記が記されている。そのため、1993年に湖北省荊州市周家台30号秦墓出土の秦始皇・二世時代の四種の暦譜、1983年～84年に湖北省張家山247号漢墓の暦譜も、その手記の存在によって「質日」に分類される。このような有記事暦譜の典型的なものは、1993年に江蘇省連雲港市尹湾6号漢墓出土のいわゆる「元延二年日記」である。「質日」の篇題はないが、そこにはこれまで発見された暦譜の中で最も多くの手記が見える。

一方、もう一種の暦譜として注目されるのが、1972年に山東省臨沂県銀雀山2号漢墓から出土した「元光元年暦譜」(前134)である。この暦譜には篇題はあるものの、筆蹟が薄く字の判読が難しかったが、「七年視日」と釈文する説が有力となっている。“視日”は伝世文献にもみえる語で、如淳は「日時の吉凶や挙動の占いを視る」者(『史記』陳涉世家の集解引)とし、“日者”の類とみなしている。日者とは戦国～漢代に活躍した民間の占家である。すると、「視日」とはそのようなそのような占家に関連する暦譜ということになる。そこで改めて「質日」と「視日」を比較すると、前者は干支日の下に墓主の手記を記したもの、後者は建除・反支・天李などの数術、および節気などの暦注を記したもの、という相違があることになろう。

このような数術や節気などを記した暦譜に関する新資料として、2002年の山東省日照市西郊の海曲106号漢墓出土の「漢武帝後元二年視日」(前87)に注目される。原篇題は磨滅して不明であるが、その主たる内容は干支日の下に記された陰陽家の“刑徳七舍”である。このような暦注によって、報告者はこの暦譜を「漢武帝後元二年視日」と定名している。これらの新資料の発見によって、暦譜は干支表に墓主の手記が記される「質日」の方向、および干支表に暦注や節気などが記される具注暦への方向、というような分化が秦漢時代の暦譜で展開したのである。

## 五行占の日本の変容 ― 天の信仰不在の日本における五行占 ―

小林春樹（大東文化大学）

天上に発生する異変を対象とする占いが「天文占」であるのに対して、「五行占」は大気圏、地上、さらには地下に発生するそれらを対象とした占いである。

五行占と五行占書の先駆けをなす占法と占書に言及した史料としては、長沙（現在の湖南省長沙市）に左遷された賈誼（前 200～前 168）の居室に、不吉な鳥とされていたフクロウが舞い込んできたときに、彼が「書を発いて之れを占」って自らの死期が近いことを知ったとする『史記』の一文があるが、五行占を体系化した最大の功労者は、賈誼よりも一世代ほどの董仲舒（前 178?～前 140?）である。ちなみに、董仲舒によって体系化された五行占とは概略以下のような占法であった。

1. 人間の代表である君主や皇帝の行動や施政が正しければ、人格神である「天」による賛意のあらわれとしての「瑞祥」が、その逆に正しくなければ天の戒告、さらには譴責としての「災異」が下されるとする「天人相関思想」、「瑞祥思想」、「災異思想」を基本理念とする。

2. 天と人とを実際に結び付ける役割を有するのは陰陽二気と、それらから生成された五行（木・金・火・水・土という、万物の物質的根源）であり、人君の善行や善政によって調和すれば瑞祥が、悪行や悪政によって不調和になれば災異が惹起すると考える。

3. そのうえで、人君の行動や施政を正すことによって災異を消伏し、瑞祥を招来することを目指す。

そのような五行占において重要な意義を有していた理念は「天への信仰」であったが、それはあくまでも中国独自のものであり、日本には本来存在しない思惟、もしくは信仰であった。それではそのような日本においては五行占が対象とした種々の災異は何故に発生し、いかなる方法によって消伏されるものと考えられたのか。さらには五行占自体に対してはどのような日本の変容が加えられたのか。本発表ではそれらの疑義に対して以下のような理解を提出する。

I. 日本に受容され、陰陽寮に専門の部署と官僚がおかれた天文占とは明暗を分かち形で、五行占は日本には受容されなかった。

II. 五行占においては天への信仰、天人相関思想、災異思想などの諸思想にもとづいて天戒、さらには天譴とみなされた災異は、日本では人間の怨霊の所為であると考えられた。

III. 五行占にかわってそのような日本的災異変、すなわち「祟り」の発生原因を明らかにするのみならず、それを消伏する役割をになったものは陰陽道であり、陰陽師であったのである。

## 日本中世期における易學の受容と展開 —桃源『百衲襖』と胡一桂『易學啓蒙翼傳』—

近藤浩之（北海道大学）

桃源瑞仙は日本中世の禪僧易學の代表者である。京都五山禪僧と足利學校は當時の易學の維持・發展を擔う主力であり、桃源は、禪林・足利學校・博士家の易學を吸収し、集大成した者と言ってよい。芳賀幸四郎氏は高く評價して「禪林易學不滅の金字塔を建立した」と云う。桃源の『百衲襖』（1477. 3. 1 成）は一種の綜合的易學解釋集成で、王注、孔疏、程傳、朱義、朱子『易學啓蒙』、董楷『周易傳義附録』、胡方平『易學啓蒙通釋』、胡一桂『易學啓蒙翼傳』等を參酌折衷して講述している（基本的には後者三書を逐一講義する）。その内容や方法には獨自の見解や見識も有り、當時の日本易學が達した水準を示す。

儒教經典の哲理の書であった『易經』を、朱子は『易』は乃ちト筮の書」とみなして『易學啓蒙』を作り『易』を占術書として実用化した。その門弟たちは『易學啓蒙』の解釋書（『通釋』『翼傳』など）を作り、それが日本に傳わり、朱子學による『易』解釋が日本でも主流をなしてゆく。禪林・足利學校・博士家の易學を總合した『百衲襖』は、日本における『易學啓蒙』の受容と展開の様相や特色を如実に示しているのである。

一、足利學校の易學の吸収。鈴木博氏の研究に據れば、足利學校出身の柏舟がその『周易抄』の中で桃源に言及するのは僅かに一箇所、桃源がその『百衲襖』の中で柏舟に言及するのは三箇所（「與派者今講主柏舟師也、余寫之入百衲襖抄中」など）。私見によれば、他にもいくつか言及箇所があり、柏舟の易學は桃源の易學にかなりの影響を與えただろう。

二、博士家の易學の吸収。『百衲襖』で「日本ノ大外記環翠老人清三位法名常忠（清原業忠）ハ、得講書三昧第一等ノ名儒ナリ、前關白一條殿（一條兼良）下二次テハ古今無雙ノ名儒也。余皆陪其講筵、親聽諸論矣。」と云うように、桃源は清原業忠の講義を聴いている。

三、桃源自身の易學の特徴。桃源の易學は、私見によれば、尊敬する胡一桂の易學の繼承が中心である。『百衲襖』では、朱子『易學啓蒙』の學を極めるため、胡方平『易學啓蒙通釋』・胡一桂『易學啓蒙翼傳』を講義し、特に胡一桂の易學を懇切丁寧に解説する。また桃源は、胡一桂『翼傳』によって易傳（易學啓蒙）を、胡一桂『纂疏』によって易經（六十四卦）を講義したかったようだが、『纂疏』の方は入手できなかったため、やむを得ず董楷『周易傳義附録』によって講義したようである。

四、易學の受容と展開の一例。胡一桂が引用した「以三錢擲之」について、桃源は、『大易斷例ト筮元龜』の「以錢代蓍法」「擲錢爻式」「擲錢卦爻式」などを引用・抄寫し、さらにその擲錢法による占いの實踐例と問題点を、具體的に講義する。實はそこにも、桃源の『易學啓蒙』研究の成果が十分に盛り込まれている。

## 宿曜道の特質と展開

山下 克明（大東文化大学）

宿曜道<sup>すくようどう</sup>とは、暦算によって人の誕生日時における九曜（七曜に羅睺<sup>らこう</sup>・計都星）の位置を算出し、これを二十八宿・十二宮等の黄道座標を記したホロスコープ上に示して運勢を占うとともに、災厄をはらう星祭を行う術をいい、これを専門とした僧を宿曜師と称した。その源流は、紀元二・三世紀頃ギリシャ・バビロニアのホロスコープ占星術がインドに伝えられて固有の二十七宿（二十八宿）の体系と融合したところにある。この占星術の要素は仏教とともに中国に伝わり、とくに盛唐期の密教では星厄をはらう法や宿曜に基づく吉凶善惡を説き、造仏や修法を行うとき吉日良辰を選ぶことが重視され、その法を説明したのが不空の『宿曜経』（乾元二年〈759〉初訳）であった。しかし実際にホロスコープ占星術を行うには暦法書が必要であり、これを可能にしたのが建中年間（780～84）に術者曹士薦<sup>そうし</sup>が編纂した『符天曆』であり民間で用いられ、ついで貞元年間（785～804）に術士李弥乾<sup>りやけん</sup>が西天竺より西方起源の占星術の書『都利聿斯經』<sup>とりいつしきよう</sup>を伝えるなど、唐末には密教よりも民間の術士達の星占が盛んに行われたようである。しかしその後は、「鄭氏星案」によると占者として唐に張果がいたがそれも続かず、元の鄭希誠は異人からこの術を授かり占驗を以て神と称されたとあるが、系統だった展開は見られなかったようである。

それに対して日本では密教のもとで大きく展開したことを特色とする。大同元年（806）に唐から帰国した空海は『宿曜経』を将来して初めて七曜日を日本に伝えた。本格的な密教の受容とともに七曜・二十八宿の知識が不可欠であったことがわかるが、占星術が可能になったのは天徳元年（957）に延暦寺僧の日延が呉越国から『符天曆』を請来してからであり、その背景には貴族社会における星辰信仰の興隆と密教の北斗法・本命供など星宿法成立の問題があった。同法で祀る本命宿は暦算による確定を必要としており、これを契機として十世紀末から仁宗・仁統・証昭らの宿曜師が輩出され、彼らは暦算を行い、宿曜勘文を作成して天皇や貴族の運勢を占うとともに祈祷の星供を行い、ここに宿曜道が成立した。平安中期以降、東寺・延暦寺・園城寺などの権門寺院は星宿法を大法に位置づけ朝廷・貴族の帰依を集めるが、宿曜師の祈祷活動も活発化した。十二世紀初頭に宿曜師深算が撰した『宿曜占文抄』では、北斗法などを属星秘法＝宿曜道の法とし、それは北天竺月氏国の迦羅王<sup>か</sup>の病苦を救った秘法で、鳩摩羅什<sup>くまらじゅう</sup>が龜茲国<sup>きんじこく</sup>より漢地に伝えものであり、唐の高宗や玄宗皇帝の災害・病を除き、日本でも藤原鎌足・僧道鏡・吉備真備らはこの属星秘法を行って高位に昇ったとの伝承をまとめている。さらに十二世紀末の宿曜師珍賀や慶算らも貴族の信仰を集め、慶算は北斗本拝供などの独自の祭供を行い宿曜道の正統な継承者であることを喧伝し、その門流は十五世紀初頭まで栄えた。

---

● 報告者プロフィール（報告順）

①氏名、②所属、③専門分野、④主要論著

①水口幹記（みずぐち・もとき）

②立教大学文学部・日本文学専修・助教

③東アジア文化史

④『日本古代漢籍受容の史的研究』（汲古書院、2005 年）

齋藤勵著『王朝時代の陰陽道』解説（名著刊行会、2007 年）

「關於敦煌文書（P2610）中風角関連条の一個考察—参考『天地瑞祥志』等與風角有関的類目」（張伯偉編『風起雲揚』、中華書局、2009 年）

「僧円能作成の厭符と彰子・敦成親王・道長への呪詛」（倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』、森話社、2010 年）

「日本呪符の系譜—天地瑞祥志・道蔵・日用類書」（武田時昌編『陰陽五行のサイエンス 思想編』、京都大学人文科学研究所、2011 年）

①工藤元男（くどう・もとお）

②早稲田大学文学学術院・教授

③中国古代史

④『雲夢秦簡「日書」の研究』（平成 3・4 年度文部省科学研究費補助金／一般研究(C)研究成果報告書、1993 年）

『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』（創文社、1998 年）

『秦簡・楚簡よりみた中国古代の地域文化の研究』（平成 15～18 年度科学研究補助金／基盤研究（C）研究成果報告書、2008 年）

「尹湾簡牘「元延二年日記」與占卜」（北京師範大学古籍与伝統文化研究院編印『第二届中国古文献与伝統文化国際学術研討会会議論文集』、2011 年）

『占いと中国古代の社会—発掘された古文献が語る—』（東方書店、2011 年）

①小林春樹（こばやし・はるき）

②大東文化大学東洋研究所・准教授

③中国古代の占い、中国古代史学史

④『「若杉家文書」中国天文・五行占の研究』（大東文化大学東洋研究、2007 年）

「『漢書』五行志の述作目的」（『福井重雅先生古稀・退職記念論集、古代東アジアの社会と文化』、汲古書院、2007 年）

「『漢書』五行志における董仲舒の役割」（『東洋研究』187 号、2013 年）



①**近藤浩之（こんどう・ひろゆき）**

②北海道大学大学院文学研究科・准教授

③中国哲学、易學思想史

④朱伯崑原著、伊東倫厚監訳、近藤浩之主編『易学哲学史』（全四巻、朋友書店、2009年）

「中国古代における文法的説明による論証とその形式」（『中国哲学』第37号、2009年）

「重新考察馬王堆帛書——以『周易』為例」（鄭吉雄主編『周易経伝文献新詮』、台大哲学叢書01、台大出版中心、2010年）

「名を正すこと——中国古典における誤解の分析と対策」（松江崇編著『誤解の世界——楽しみ、学び、防ぐために——』、北大文学研究科ライブラリ、北海道大学出版会、2012年）

「「神明」の思想——『易伝』を中心に——」（佐藤鍊太郎・鄭吉雄編著『中国古典の解釈と分析——日本・台湾の学術交流——』、北海道大学出版会、2012年）

①**山下克明（やました・かつあき）**

②大東文化大学東洋研究所兼任研究員、国際日本文化研究センター共同研究員

③日本古代中世文化史

④『平安時代の宗教文化と陰陽道』（岩田書院、1996年）

『陰陽道の発見』（NHK ブックス、日本放送協会、2010年）

「陰陽道の成立と儒教的理念の衰退」（『古代文化』第59巻第2号、2007年）

「密教修法と陰陽道」（大橋一章・新川登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築——東アジアのなかの日本——』、勉誠出版、2012年）

「陰陽道信仰の諸相——中世初期の貴族官人・都市民・陰陽師——」（上杉和彦編『経世の信仰・呪術』、竹林舎刊、2012年）

①**細井浩志（ほそい・ひろし）**

②活水女子大学文学部・教授

③日本古代史

④『古代の天文異変と史書』（吉川弘文館、2007年）

『古代壱岐島の世界』（編著）（高志書院、2012年）

「時間・暦と天皇」（『岩波講座 天皇と王権を考える 8巻』 岩波書店、2002年）

「日本古代の宇宙構造論と初期陰陽寮技術の起源」（『東アジア文化環流』1-2、2008年）

「平安貴族の遅刻について」（『時間学研究』4、2011年）